

一次研究用フォーム		データ記入欄		
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌		
	タイプ			
タイトル情報	論文の英語タイトル	Cutaneous squamous cell carcinoma treated with Mohs micrographic surgery in Australia I. Experience over 10 years.		
	論文の日本語タイトル			
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）		
	ガイドライン上での目次名称	SCC-CQ2-6、WEB-CQ2-4, SCC-CQ 4-3		
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー／メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ IV）		
	Pubmed ID	16021121		
	医中誌 ID			
	雑誌名	J Am Acad Dermatol.		
	雑誌 ID			
	巻	53		
	号	2		
	ページ	253-60		
	ISSN ナンバー	1097-6787 (Electronic)		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）		
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）		
	発行年月	2005		
	著者情報		氏名	所属機関
		筆頭著者	Leibovitch I,	Oculoplastic and Orbital Division, Department of Ophthalmology and Visual Sciences, Royal Adelaide Hospital, University of Adelaide, Adelaide, Australia.
その他著者 1		Huilgol SC,	同上	
その他著者 2		Selva D,	同上	
その他著者 3		Hill D,	同上	
その他著者 4		Richards S,	同上	
その他著者 5		Paver R.	同上	
その他著者 6				
その他著者 7				
その他著者 8				
その他著者 9				
その他著者 10				

一次研究の 8 項目	目的	Mohs 後の再発と臨床所見との関係を調べる	
	研究デザイン	コホート研究（多施設共同）	
	セッティング	オーストラリア	
	対象者	1993-2002 に Mohs を受け The Australian Mohs surgery database に 1993 から 2002 に登録されていた症例（症例数 1263、61.1%が初回治療例、38.9%が再発例 96.5%が頭頸部原発 SCC）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず（ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず（ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず（ 14 ）	
	介入（要因曝露）	患者特性、原発巣の特徴、初診までの期間、部位、腫瘍のサイズ、切除後の皮膚欠損のサイズ、再発かどうか、組織型	
	エンドポイント（アウトカム）	エンドポイント	区分
	1	5 年再発率	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	再発腫瘍は初発腫瘍より大きく（$p < .0001$）、術後欠損も大きく（$p < .0001$）、Mohs 術の追加切除回数が多く（$p < .0001$）、術前の臨床的マージンを超えた浸潤を伴った症例も多かった（$p = 0.02$）。また、未分化、棘融解型（$p = 0.02$）が多かった（未分化、棘融解型は大型で切除範囲が大きく（$p < 0.001$）、臨床的なマージンを超えた浸潤も多かった（$p < 0.005$）） Mohs 治療後の 5 年間の再発は全体で 3.9%で、初回群 2.6%、再発群 5.9%だった。転移症例はなかった。再発と関連する主な因子は、再発の前歴、術前の臨床的なマージンを超えた浸潤と Mohs の追加切除回数であった（腫瘍の存在部位、組織型、初診時のサイズ、術後欠損と 5 年再発率との関連は認められなかった）。	
	結論	この試験には高リスクの症例が多く含まれていた。しかし Mohs 法によって 5 年局所再発率が低かったことは、本法によるマージンコントロールの重要性を強調するものである。	

	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	宇原 久
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（Ⅳ ） 考案における、SCC の治療に関するレビューも良くまとまっている。 SCC の治療に関する現時点における中心的なレビューの一つとして よい。